

統語論・意味論・形態論の研究(2)

高橋 英光

単著、論文集ともに優れた図書が数多く刊行された1年であった。

認知言語学の分野では、海外出版社から2点、画期的な図書が出版された。Toshiyuki Kumashiro (熊代敏行) の単著 *A Cognitive Grammar of Japanese Clause Structure* (John Benjamins) と、Masa-aki Yamanashi (山梨正明) の序文付き編著 *Cognitive Linguistics*, 5 vols. (SAGE Publications) である。

前者は、ラネカーの認知文法の枠組みによる日本語の主要な節構造の初めての体系的な分析である。日本語は、英語とは異なり主格-対格表示型(例「花子が太郎を責めた」)よりは与格-主格型(例「研究室の前に先生がいる」)や二重主格型(例「太郎が家庭教師が外国人だ」)、話題-主格型(例「この花瓶は太郎が壊した」)が主流である。このような言語間の差異を著者は2つの実体を含む事態の概念化の差異ととらえる。主格-対格表示型は2つの実体の直接的相互関係、与格-主格型と二重主格型は実体間の相互関係が階層をなし、話題-主格型は線的参照点構文、とそれぞれ概念化されていると分析する。さらに述語レベル主語と節レベル主語を区別し、与格-主格型はもっぱら節レベル主語として機能するのに対して二重主格型では述語レベル主語として作用することを提唱し、与格-主語構文の名詞句の主語の特徴づけや二重主格構文を構成する2つの実体の文法の特徴づけをめぐる論争への解決法を与えている。本書は、認知文法はいかに日本語の文法構造分析に適用され、そこからどのような洞察が得られるのかを豊富なイメージ・スキーマを駆使して明解な説明を提示している。これまで生成文法の枠組みによる日本語の文法構造の体系的な英書はあったが認知文法の枠組みによるものはなかった。ラネカーの下で博士号を取得した著者による本書の刊行はこのギャップを埋める意味でも大きな意義がある。

後者は、認知言語学の主要な学術論文を集成したものであり、認知言語学の分野で長らく指導的役割を果たしてきた編者がシリーズSAGE Benchmarks in Language and Linguisticsとして出版したものである。1巻「理論と方法」、2巻「認知音韻論と形態論」、3巻「認知文法と統語論」、4巻「認知意味論」、5巻「認知言語学と関連領域」の全5巻からなり、“Syntactic Amalgams”, Lakoff, G. (1974, *CLS* 10) や “An Alternative to Checklist Theories of Meaning”, Fillmore, C. J. (1975, *BLS* 1) のような1970年代の古典から2010年以降の“Constructionist Approaches”, Goldberg, A. E. (2013, In *The Oxford Handbook of Construction Grammar*) まで計53編が収録されている。この中には今では入手しにくい、もしくは忘れられた重要な論考も含ま

れている。類書の Evans, Bergen and Zinken, ed. (2007) *The Cognitive Linguistics Reader* (Equinox) が 1980 年代後半から約 20 年間の 28 編の収録数であることを考えると本編は論文の収録期間も収録数もほぼ 2 倍近く、そのスケールの大きさがわかる。編者の序文では認知言語学の発展および関連領域に与えた多大な影響と今後の展望が簡明にまとめられ非常に有益である。筆者が個人的に興味をもったのは 1 巻に収集の Newman, J. (2004) である。これは 1977 年にラネカーが UCSD の秋学期の 'Space Grammar' の講義を行った時に大学院生として参加した著者による回想ノートの論考である。Newman によれば、講義の第一日目にラネカーは 'grammar is non-generative', 'no division into discreet components', 'no transformational rules, in fact no syntax as a distinct entity' という当時の言語学の常識を完全に否定する主張を繰り返したと言うが、ここにラネカーの認知言語学の萌芽を見ることができる。認知言語学研究に携わる各国の研究者と認知言語学を志す若手の研究者に本論集がもたらす恩恵の大きさは計り知れない。

メタファーについて注目すべき単著が出版された。鍋島弘治朗『メタファーと身体性』(ひつじ書房)は、メタファーの本質とは何なのか、そしてこの疑問に答えるにはメタファーを含む人間の認知がいかに身体に根ざすかの解明が不可欠であることを論じている。本書は「メタファー研究の基礎」、「身体性メタファー理論」、「メタファー研究の発展」の 3 部構成からなる 433 ページの大部である。個人的に興味をそそられたのは、アリストテレスからリチャーズ、スペルベル・ウィルソンの関連性理論さらに現代の(認知)言語学者の山梨、瀬戸、楠見それぞれのメタファー論を「相違」と「類似」の観点から比較した表 5.1 (p.92) と著者による批判的検討である。「ギリシャから 2 千年を超えて諸家の心をつかんで離さないメタファーはこれからも多くの謎を提示し続けることだろう」と著者は最後に締めくくることが、本書は脳科学、哲学、心理学の知見に言及しつつメタファー研究のあり方に重要な問題提起をしている。著者の学識と射程の広さに感服しつつ今後の研究の進展を期待したい。

瀬戸賢一『時間の言語学——メタファーから読みとく』(ちくま新書)は、人間が頭の中で時間をどのように捉えているのかを実際に使われたことばの詳細な観察・分析を通して明らかにする。はしがきで著者は時間が過去から未来へ進むという常識的な捉え方とは対照的に「言語的証拠をもってすれば、時間そのものは、未来から過去に進むとしか言いようがない」と述べ「もうすぐ夏休みがやって来る」という例を挙げるくんだり強く読者の興味を引きつけよう。本書には「時間」と「とき」の語義数の違いに関する洞察を含め興味深いデータと論考が満載されている。時間のメタファーの対照言語学として、新しい時間論として、そしてレトリック研究としてすこぶる魅力的な読み物となっている。

小松原哲太『レトリックと意味の創造性——言葉の逸脱と認知言語学』(京都大学学

術出版会)はコミュニケーションにおける認知と効果の観点からレトリックの本質を明らかにする試みである。認知言語学の枠組みを用いて「意味の伸縮」、「文法のゆらぎ」、「対話の弾力性」の問題に挑み、広範囲の現象を意欲的に扱っている。レトリック研究を志す人に有益な情報と洞察を提供するだろう。

瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望『認知言語学演習 I 解いて学ぶ認知言語学の基礎』(大修館書店)はユニークな演習方式の教科書である。「ことばの〈解釈〉,世界の〈解釈〉」と「どこまでいってもカテゴリー」の2章からなり「解釈とは意味の獲得行為である」、「身体に精神が宿るのではなく、精神に身体が宿る」など認知言語学の精髓をとらえた粹な表現が随所で使われ、読者・学生は基本事項を読み設問を解きながら言語分析法を身につけられるように本書は設計されている。さらに「演習」、「課題」に加えてその「解答」、「実力問題」、「探求テーマ」、「探求への道」が準備されている点で教育経験の少ない大学教員にも教科書として使いやすいただろう。『ファンダメンタル認知言語学』(野村益寛, 2014, ひつじ書房)と共に学部専門レベル向きの認知言語学のテキストとしてお薦めできる。

つぎに、叢書・シリーズを見る。小山哲春・甲田直美・山本雅子『認知語用論』(くろしお出版)は、主に日本語の語用論現象を分析する上での認知言語学的アプローチの様々な可能性を追求する。従来の語用論研究では発話と文脈における言語表現の解釈や聞き手・読み手の推論の分析に偏りがあったことを踏まえ、本書は言語使用とその解釈の内面(認知プロセス)に踏み込み、社会(語用)認知能力、焦点連鎖、人称代名詞、視点構成に関わる認知プロセスを意欲的に取り上げる点が独創性である。同名の既刊論集 *Cognitive Pragmatics* (Schmidt, Hans-Jörg, 2012, De Gruyter Mouton) を合わせて読むと本書の特徴がいっそう鮮明になるだろう。

久野暲・高見健一『動詞』が「謎解き英文法」シリーズ(くろしお出版)の第9弾として出版された。Help someone VPは主語の直接的手助けを表すが Help someone to VPは主語の間接的手助けを表すという Bolinger や Dixon の説があるが両表現に意味の違いはなくレジスターやスタイルの違いにすぎないこと、相互動詞の特異性、例えば She met a *New York Times* reporter. は適格だが *A *New York Times* reporter met her. は不適格であること、This house will sell easily. は適格だが This house will buy easily. は不適格などの現象に関わる中間構文に課せられる制約など、英語の動詞の多様な現象をわかりやすく説明している。既刊と同じく従来の定説を実例に基づいて徹底的に検証してその不備を指摘し代案を提示するというスタイルが貫かれ読み応えがある。「付記・参考文献」では理論言語学的な考察・洞察を読むことができるのも読者には大変有り難い。

開拓社言語・文化選書から今年度も多くの図書が出版された。上山恭男『機能・視点から考える英語のからくり』は、英語のコミュニケーション能力の育成を念頭に入

回顧と展望

れて英語のさまざまな「からくり」——具体的には、視点、主題・題述、新・旧情報、連続性など——を読者に解説したものである。特筆すべきは、著者が日本における近年の英文法教育の軽視に強い警鐘を鳴らし機能言語学からの知見を取り入れた英文法教育の復権を提唱していることである。英語学者かつ英語教育学者である著者の学識と洞察が凝縮されている。本選書からは他に、中森誉之『外国語音声の認知メカニズム』、武田修一『教育英語意味論への誘い』、溝越彰『時間と言語を考える』、濱田英人『認知と言語』、中野清治『英語仮定法を洗い直す』が刊行されている。

論集に目を転じよう。松本曜[編]『移動表現の類型論』（くろしお出版）は互いに系統が異なる13言語における移動表現の性質を統一的に検討した論集である。編者はすでにこれまでの一連の研究でタルミーによる「動詞枠付け言語」と「付随要素枠付け言語（またはサテライト枠付け言語）」の2分法の不適切さ・限界を指摘している。本巻では代わりに「経路主要部表示型」と「経路主要部外表示型」の区別を立て、各言語には移動を表すどのような表現形式があり、どのように移動を表す文を構成し、どのような言語内変異を見せるのか、を10名の共同研究者と共に検討した成果を報告している。当該分野の第一人者によってその最先端研究の一端がこのような一冊の論集にまとめられたことは大変喜ばしい。とりわけ際立つのは本巻の方法論の緊密性と統一性の高さであり、論集作成のための良いお手本になりそうである。執筆者は編者以外では、江口清子、松瀬育子、Christine Lamarre、高橋清子、千田俊太郎、吉成祐子、河内一博、守田貴弘・石橋美由紀、古賀裕章。

中村芳久・上原聡[編]『ラネカーの(間)主観性とその展開』（開拓社）は、「ラネカーの(間)主観性を明らかにし、それとの関わりで他の諸説を位置づけ、新たな提案もしていこう」という研究企画から結集した論集である。各章を読み進めると、「主観性」、「主体性」、「間主観性」などの概念の捉え方がラネカーと他の研究者ではどのように異なり、「主観化」や「主体化」あるいは「主体性」はどのような見直し・再検討が必要で、どのような応用が可能なのか、を学ぶことができる。各章は理論的考察とケース・スタディーの両面で優れた知見に満ちているが、個人的にはチョムスキーの recursion の問題に認知文法の観点から光を当てた第9章「言語における再帰と自己認識の構造」（長谷部陽一郎）の論考にとくに興味を抱いた。著者は、基本的な自己認識・対人認識の再帰構造を把握する能力は一種の基本的認知能力であり、この提案はラネカーの概念化の階層モデルの考え方と合致することを英語と日本語の例を挙げて示し、最後に「埋め込み文」の背後に「脱主体化」（中村2013など）のプロセスがあると主張する。本巻は理論的背景の違いに拘わらず非常に多くの言語学者に問題提起をする刺激的な論集となろう。執筆者は編者と上記以外では、本多啓、濱田英人、町田章、野村益寛、早瀬尚子、對島康博、深田智、廣瀬幸生。

語用論の分野でもすぐれた論集やテキストが出版された。小野寺典子[編]『発話の

はじめと終わり——語用論的調節のなされる場所』(ひつじ書房)は発話の周辺部(はじめと終わり)にはどのような表現が用いられ、どのような機能を果たすのかを考察している。周辺部を「メタテクスト的ならびに／ないしはメタ語用論的構文が好まれ、ユニット全体を作用域とする」ととらえ、日本語の名詞「こと」の終助詞化、接続詞「だから」と接続助詞「から」の機能とその拡張、卑罵語「やがる」および英語の sort/kind of などが扱われ、周辺部とは言語コミュニケーションにとって重要な場所であり文法化、構文化と深いつながりがあることを明らかにしている。本論集は英語と日本語の周辺部の類似点と相違点の本格的な対照言語学研究にとどまらず世界の諸言語の周辺部の類型研究への道を開くものである。執筆者は編者以外では、Joseph V. Dias (岩井恵利奈 訳つき)、東京裕子、澤田淳、Elizabeth Closs Traugott (柴崎礼士郎 訳つき)。

小野正樹・李奇楠[編]『言語の主観性——認知とポライトネスの接点』(くろしお出版)は、日本語、中国語、韓国語、英語の4言語の多岐にわたる文法現象を語用論の観点から分析した研究報告である。日英語における時間のメタファー、日中両語のヴォイスと視点、「てくる」の対照言語学的・歴史的研究、日韓語の親族呼称、「かもしれない」や不満を表明する「よ」のポライトネスなど文法と語用論の接点に位置する重要な現象が論じられている。個人的には、引用という機能は同じでも言語形式が異なると引用者の事態との関わりや聴者との関わり方が異なるという洞察(第11章)に興味を引かれたが、主観性やポライトネスの問題に加えて個々の言語の独特の発想や外国語として日本語を学ぶ・使用する時に生じる問題が浮き彫りにされている点で、対照言語学のみならず応用言語学の研究としても読むことができる。執筆者は編者以外では、廣瀬幸生、彭広陸、趙華敏、于榮勝、澤田淳、蔡盛植、山岡政紀、牧原功、金玉任。

注目すべきシリーズが刊行された。中野弘三・中島信夫・東森勲(監修)による「言語表現とコミュニケーション」(朝倉書店)全3巻である。本シリーズは「言語表現」、「コンテクスト」、「語用論的能力」の3つのキーワードを軸に第1巻「語はなぜ多義になるのか コンテクストの作用を考える」(中野弘三編)、第2巻「対話表現はなぜ必要なのか 最新の理論で考える」(東森勲編)、第3巻「発話の解釈はなぜ多様なのか コミュニケーション能力の働きを考える」(中島信夫編)の3巻からなる。各巻は編者による詳しい解説・論考で始まり、その後には各々の分野の第一線で活躍する他の執筆者による論考が続く。扱われている現象は、多義、語義の歴史の変遷、借入語(以上第1巻)、対話表現、法表現、婉曲表現、談話標識、配慮表現、文法化、若者言葉(以上第2巻)、発話解釈における推論、発話行為の選択と解釈、発話行為とポライトネス、否定と否認、アイロニー、ジョーク(以上第3巻)など射程がきわめて広く最新の研究成果が盛り込まれている。広範囲の現象が網羅されている上に多様な理論的枠組

回顧と展望

みを用いた分析が本シリーズの価値をいっそう高めている。近年、語用論研究の広がりには目を見張るものがあるが意味論と語用論についての本シリーズの発刊はこの動きをますます加速させることだろう。執筆者は、編者を除くと第1巻は大室剛志、早瀬尚子、井門亮、石崎保明、前田満、第2巻は柏本吉章、塩田英子、大津隆広、村田和代、米倉よう子、尾谷昌則、第3巻は五十嵐海理、春木茂宏、東森勲。

最後に、加藤重広・滝浦真人[編]『語用論研究法ガイドブック』(ひつじ書房)は語用論の類書と一線を画すユニークな図書である。本巻は「語用論の教科書は充実してきたが、ではその1冊をしっかりと勉強した人が、自分で得た問題意識に沿って研究を始めることができるだろうか? それはかなりむずかしいだろう」という問題意識から生まれた待望のガイドブックである。スタンダードな語用論の分野の研究のみならず「歴史語用論」、「対照語用論」、「実験語用論」、「応用語用論」、「語用論調査法」の研究についても手ほどきする。主に日本語の現象が扱われている理由のひとつに編者・著者が指摘する「日本語の語用論度の高さ」もあるが、いずれにしても語用論的研究に着手するすべての人を優しく導くことを期待させる図書である。執筆者は編者を除くと、澤田淳、椎名美智、堀江薫、松井智子、清水崇文、熊谷智子、本山幸子。

認知言語学も語用論もそれぞれ今年度はすこぶる生産的な年であったが、これはそれぞれの学会活動が活発で会員数が上昇傾向にあることと無関係ではないだろう。さらにこれらの二分野を融合する研究書が目立ったが、この傾向はもうしばらく続きそうである。

(北海道大学名誉教授)